

## 吹田市中学校給食在り方検討会議意見

### 1 第1回検討会議より

- 喫食率の低い学校では、教室から配膳室が遠いという子供達や好き嫌いや、量の関係などから、弁当を持ってきている生徒が多い。
- 今後の吹田市の中学校の給食の在り方は、例えば次の5点がポイントであると出すことが、この検討会議のアウトプットになる。
- 現在の中学校給食は、初回の手続きが、面倒。小学校で温かい給食を食べていたが、おかずが冷たいお弁当方式への変化、「冷たい、美味しくない。」などの噂が先立ち、給食の注文に抵抗がある。
- 試食会などに参加し、おかずが冷たい理由や、栄養価の良さなどを理解できたので、給食の注文を考えるようになり、子供にとっても弁当分の荷物の軽減になり、週に何度かでも注文を行うようになった。
- 他の保護者に中学校給食のイメージを聞いてきたが、資料にある意見が多かったのと、アレルギー対策がしっかりされていないとのこと。
- 弁当は家族に作ってもらう安心感がある。教室から配膳室が遠いと、次の授業に遅れ、先生に怒られるので、給食を頼まない。
- 給食は全体的に茶色いイメージで、冷たいし、小学校との連続性がなく、不安を感じるので、なかなか給食を注文しようという考えに至らない。
- 小学校から中学校にあがるにつれて、教育上丁寧にやるのが良いのか、悪いのかの議論はあると思う。
- 小中一貫教育で、小学6年生が中学校に登校するという取り組みを行っており、中学校の給食に少し慣れていることが高い喫食率に繋がっているのではないかと思えるが、この取り組みはどこの学校でもできるわけではない。
- 喫食率を上げるだけであれば、意見を元に解決していけば改善される、例えば、配膳室に関しては、各階に設置するなど、あるいは小中学校の連携として、少し慣れさせる期間をとる、体験の時期を設けるなどの対処をとっても良いのではないか。
- アレルギーがある子供が多いので、完全に全員が同じ食事というわけにはいかないこと。全員喫食の市町村では、おそらく特別な対応をされていると思うので、アレルギーに関しては別のファクターを考える必要がある。
- 全員喫食の方向に向かって、理念が明白に打ち出されているのであれば、全員喫食の方向に向けてやるのにはどうしたら良いのかという具体的な話になっていく。
- アンケート調査で、選択制の中でのデータしかないので、実際に全員喫食である小学校の保護者のデータなども照らし合わせる必要性もある。

- アンケート結果から、生徒も保護者も家からの弁当がほうが良いという意見が、実際に弁当の用意をしている数よりも少ないので、その齟齬がもう少し明らかになってくれば、全面的に全員喫食を実施するということに結びついてくるのではないかと感じる。
- 本当はもっと食べないといけないのに弁当の量が少ない、好き嫌いなどで栄養が偏ってしまう、その他もあると思うが、アンケートを踏まえてそのニーズに合うように解決していく方向だけだと、そうした問題をそのまま残したまま、中学校給食が進んでしまうことになる。
- 堺市や茨木市のように、教育の一環として考えるのであれば、場合により中学生ご自身や、ご家庭のご不満があっても、これが中学校の給食としてあるべき姿であると示す必要がある。そうしていくのであれば、喫食率も高くしないといけないし、全員喫食を実施しなければならないので、そのあたりのバランスが大事。
- アレルギーのように細かく対応することが困難な場合、食事として問題があるから教育の一環として食の教育を提供するといった方向でいくのであれば、議論している方向になると思う。
- 給食の本筋と違う予約が面倒だとか、配膳室の場所が遠いだとかの課題があるが、それらは、給食の本質とは違うところで、現場での課題はあるでしょうが、解決の方向性として出せるものだと思うので、まず課題としてとらえ、改善していくものという認識を持っていく必要がある。
- 給食本体の部分については食育というものがキーワードになって、あるべき栄養の姿、あるべき食べ方の姿、こういったものがまず、議論されていくような方向性をここで出していくのが、一つの整理。
- 食育の面ですけれども、現状の選択制でも、不可能でないということと、食育というのは他の教科との連携との中で、進めていくことであって、全員気喫食が実施されないと、食育はなかなか難しいということではないと思う。生徒への配布資料の中に情報をつけるなどしての、食育は可能。
- 教職員の休憩時間は、昼45分あり実際、動いたりするが、休憩を取るという形を定められている。ここに全員喫食となり生徒への指導が入ってきた場合、全員喫食をしている他市町村では休憩時間どのように取っておられるか、また、小学校ではどうしているのかを確認する必要がある。

## 2 第2回検討会議より

- アンケートの結果の現状、給食を食べているかどうかと保護者が求めていることは、全く違い、保護者は、中学生という一番食事が大事な時期に、栄養面とか食育ということで、大切なことを教えられ、みんなが平等に食べることができる、おいしい給食を求めている。
- 子供は、出された物を食べるというのが、主であり、それを選択しているのは、保護者なので、その意見は、とても大事。
- いろいろな分野の人にも意見を聞いてきたが、調理をしていたとかで携わるほど、子供達においしい温かい給食を食べさせてあげたいという思いが一番強いというのは、話を聞いて感じる。
- 保護者として、作る方としても、一生懸命、栄養価を考えて、一番伸びる時期、食べなければいけない時期という思いで、弁当は、作っているが、それがコンスタントにみんな、子供達に差が無く、食べられる状況というのは、大事だと思う。
- 子供達は、現在の給食についてメニューが多彩で、自分達が好きな物をタイミングよく、組んで貰っていて、すごく喜んでいるように思う。
- 中学生なので、おいしくなかったという声や苦手な食べ物が多くて、食べ残しが多いという実感はあるが、おいしかったと言う子供達が、何人か毎日いますので、現在の給食に満足してくれているのではないかと思う。
- 家の弁当であれば、いろいろ工夫されているが、限界があったりするので、給食だったら、いろいろな物を食べられるのではないかと思う。
- 給食の食べ残しが多い、ご飯の量が多いといった子供達もいるが、食べ続けることによって食べられるようになったので、全員が給食を食べられるようになって良いように感じる。
- 現在の給食のランチボックスという形式が、全部食べるのも残すのも、その子供次第というのがあり、残して蓋を閉め、返してしまうと、それでお終いという本人の意思で食べる、食べないものを決めていて、食べ残しも凄く、増えているのではないのかと感じる。
- 小学校と中学校で本人の意思の比率というのが、段々と高まっていく過渡期だと思う。その時に、子供達にどのような判断をさせることが、中学校給食にとって良いのか大きな問題提起になっていると感じる。
- 食育、要するに教育の一環と保護者のニーズのどちらに合わせるか、どこにバランスの焦点を置くかということに落とし所を決めていくことになると思う。
- アンケートに関しては、良くない理由を選択させるということは、誘導尋問のようになっているので違和感を覚える。

- 小学校と中学校と食事スタイルが違うだけでなく、その場の雰囲気が大きく影響し、その中で、自己決定が判断される。ランチボックスという食事スタイルになると、それが、個人の自己決定だけに寄ってしまう。  
本人の嗜好や、その時の雰囲気、それからその時の心理状況なんかで、喫食が変わってくるので、ランチボックスで可能か議論が必要と思う。  
形態が変わるからでなく、そうした相互作用が可能であれば、現状でも問題はないと思う。
- 中学校給食の話をするのに、給食のことばかり議論しているが、中学生が持っている一つのライフスタイルというか、中学生としての思いとか、クラスの雰囲気とか、かなり大きな所から、本来は議論が必要と思うが、その議論には、時間がかかる。
- アレルギー対応で小学校と同様とありますが、現在の負担や役割分担はどのようになっているかを確認する必要がある。小学校では、給食費の返金業務などで職員の負担がある。  
全員喫食のデリバリー方式では、昼休みに配膳室へ生徒が集中するので、それらの影響を考え、対処する必要があるのではないかと思う。
- 栄養教諭はコーディネーターで、実際に食育を推進していくのは教員であるため、教職員の目的意識と全体的なビジョンをしっかりと持つて行うことが必要である。
- 教職員の負担が増える分をどこまで求めるのか十分考察してから、給食の実施方式と同様に一緒になって、考えていく必要がある。
- 栄養教諭の取組を各中学校間で現場との横のつながりを持ちながら、共有認識としていく仕組みが必要。
- 建築方式につきましては、ここでは専門家もいないので議論するのはなかなか難しく、給食のニーズや方法について議論した方が良い。
- どの方式であっても汁物が必要になると思います。給食時間が短い中では、給食を残す生徒が多いので、汁物があると食べやすくなり、食べる時間も短縮できると思いますし、汁物の献立には、野菜も入れやすい。
- 実施方式によっては食育の手法が変わるから、そのことの落とし込みが必要です。食缶は配膳業務に生徒が関わるので、ランチボックスとは違う食育ができます。また、ランチボックスでもできる食育はあると思う。